



Title	キェルケゴールの「後書」第一部研究
Author(s)	渡部, 光男
Citation	基督教学, 3, 50-54
Issue Date	1968-07-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46229
Type	article
File Information	3_50-54.pdf



[Instructions for use](#)

キエルケゴールの『後書』第一部研究

渡 部 光 男

この小研究はキエルケゴールの著作活動の中心をなすと言われる『哲学的断片への完結的非学問的後書』（一八四六年）の第一部「キリスト教の真理に関する客観的問題」についての発生史的研究である。『後書』の全体は「客観的問題」と「主体的問題」との二つの部分に分かれたれ、それ等が消極的真理関係と積極的真理関係と云う弁証法的構造をとっている。第一部は『断片』と『後書』との連結部であって、『断片』に於いて提起された諸問題を引きつぐと同時に残された問題としてキリスト教の客観的側面が取り扱われる。いわば、それは『断片』の「啓示論」に対する補足である。第一部は二つの章に分かれ、第一章では聖書、教会、歴史的証明が、第二章では思弁的観察が論ぜられる。

『断片』に於ては、イエスの出来事としての瞬間、同時性、直接並びに間接の弟子との関わり、逆説、躓き、罪と救済、再生、決断、信仰などいわゆる伝承的教義学的な事柄が、新たな実存的視点から、いわば半ば詩的に、半ば思弁的に練り上げられ、新しき意味で実存＝伝達 (Existenz=Medeløse) として示されている。『後書』その続編として、その様に理解されたキリスト教に対する個人の実存的関係、いいかえれば、その様な教義に対する自己の關係に無限に関心をもつ個人の配慮 (SVVII 8) を問題とする。

仮名ヨハネス・クリマクスはまず聖書に向う。彼の主張を要約すれば、「客観的主体がキリスト教を歴史的記録として考察するなら、それは歴史的真理一般に関わることに終り、最大限に追求しても、結局は近似以外には終らない。

最大の学識をもって聖書を追求したにしても研究成果は歴史的知識の宿命として近似性にとどまる。しかも聖書に関する客観的知識はキリスト教信仰と同一ではないが故に単なる文献学上の功績にすぎない。更に研究者が主体的にならねばなる程、彼の主体的問題は決断の問題であるからして、取り残されて行く。」以上がクリマクスとしてのキェルケゴールの主張である。これを後期キェルケゴールの仮名アンチクリマクスの主張と比較すれば、これとは厳しい対立をなしている。ヨハネスクリマクスの立場はあくまでも信仰形成哲学者であるのに対し、アンチクリマクスは一種の教義学者である。ヨハネスクリマクスは信仰対象を極めて象徴的に「時間」に於ける神」とか「逆説」とか「逆説」などの実存伝達であるとするのに対して、アンチクリマクス「歴史」を超越した「救済史」に於けるキリストとして、イエスの言葉を語らねばならなかったものであり、招き給う方としてのイエスをほぼ史実的に描かねばならなかったのである。従ってアンチクリマクスとしてのキェルケゴールは聖書を歴史的客観的に取扱っていることとなる。その場合アンチクリマクスに於いては、聖書は前批判的に素材に前提され自明なものとして「瞑想的現在化」によって直観的に「神人」へ接近するための通路として用いられている。だとすれば、当然、聖書に対する客観的研究も問題とされるべきであったが、ヨハネスクリマクスは於いてはそれが保留されているのであって、それが『後書』を貫ぬく一つの「設定の図式性」として未処理のままのこされている。こうしてキェルケゴールはフィクシヨナリズムに落込んで行ったのであろう。

次に十九世紀四十年代の神学的状況をヘーゲル左派、テュービンゲン学派、ヘーゲル中間及び右派、調停神学、信仰覚醒神学の最盛期と理解するならば、キェルケゴールの視野は極めて広いと云い得る。新約関係だけにとどめて、キェルケゴールの所有した参考文献は、Mynster, Martensen, H. N. Clausen, A. F. Beck, Strauss, Feuerbach, B. C. Baur, de Wette, Daub, Rosenkranz, Marheineke, Lücke, A. Tholuck, F. A. G. Tholuck, Rudelbach, Jul. Müller, Harms, Hase, Schleiermacher 等のものである。十九世紀神学の状況の中にクリマクスを置くとき、彼はは

つきりと十九世紀神学の刻印を帯びていることが認められる。クリマクスに於いては一種の信仰覚醒神学のモティーフのもとでシュントラウスの『イエス伝』が提起した問題は『新約聖書』の解釈及び研究の問題としてではなしに、信仰形成の問題として受止められ、しかも主体性真理概念に先行する消極的客観的真理概念として相対性を示すものとして取扱われ、その際にシュライエルマツハーの体験論より深化させた形、即ち実生成論に於いて処理され批判的研究は保留されている。この様なクリマクスの取扱いはシュライエルマツハーの外に調停神学の一部と信仰覚醒神学とに共通するものである。この意味でキェルケゴールは『断片』及び『後書』の第一部に於いて当時一般的であった思弁神学的な論法を用いていると言い得る。

第二項に於いてクリマクスは教会を論ずるが、対象は国家教会一般ではなく、特にグルントヴィの教会論を問題とする。グルントヴィによれば、キリスト教は確実な宗教体験でも、特殊な倫理でもなく、神と人間との関わりであり、それが教会的礼典に於ける生きた言葉に於いて支えられるとされ、これを『無比の発見』と称したが、クリマクスの主張はこうである。「問題が客観的に取扱われるならば教会に關しても聖書の場合と同様な困難が生ずる。つまり現存の教会と原始教会との同一性が主張されるためには証明が必要であり、信仰告白、聖礼典に關しても同様であつて原理的には近似以上を出さない。」さてキェルケゴールの思想的發展の中で教会が正面から論ぜられるのはこの箇所の外に『キリスト教への修練』と『自らを裁け』、『瞬間』などの教篇しかないが、私見によればキェルケゴールの最後の「教会闘争」を当時の信仰覚醒運動の一派のうち、最も反教会的であつた「残存覚醒派」との関連で理解しているが、もしキェルケゴールの教会観が弁証法的に最後期まで發展して行つたとすれば、この『後書』の箇所は「教会闘争」の重要な伏線をなすものであろう。第二にクリマクスの論述の背景に、一八二五年のH・N・クラウセンとグルントヴィとの間で行なわれた教会論争をおくとき、クリマクスは明らかにクラウセンの側に立っている。第三に第二項に於いて賛美をこめて語られているリンベアとキェルケゴールとの関わりに注目すれば、キェルケゴールの思想に

は絶えずリンベアの影がつきまといつてゐることは他の論文で明らかにした所である。キェルケゴールには二面性、即ち極めて初期からヘルンフートのキリスト教集団と国家教会への表面的関係との二面性があることは注目すべきである。この意味からしても第二項の教会論は最後の「教会闘争」への重要な伏線である。

さて第二章に於いては思弁的觀察が問題とされる。クリマクスによれば「思弁的觀察はキリスト教を与えられたものとして理解し、その永遠の真理を哲学的思惟によつて徹底的に解こうとする。その結果、歴史的に与えられたものとしてのキリスト教と無時間的な思惟との同一性が主張される。思弁は個人のキリスト教への関係には無関心であつて、永遠の相のもとで実存を度外視する。」この様な思弁に対するきびしい批判はキェルケゴールの全著作活動を貫ぬくものである。当然この様な思弁に対する批判はヘーゲルを中心とする十九世紀の思弁哲学、思弁神学に対するものである。しかしE・ヒルシュの有名な結論「キェルケゴールの思想の分析と解釈に當つては、ヘーゲルへの関係心におくのは誤りである」は充分支持されよう。更に一九五五年に行なわれたD・リッチルとN・トルストルプとの間を中の論争は注目に値する。最後にキェルケゴールに於いては、例えば『不安の概念』が徹頭徹尾思弁心理学で貫ぬかれてゐる様に、キェルケゴールのヘーゲル批判も、ヘーゲルとは別の極の思弁的精神で行なわれていることは極めて重要なことである。

こうして結論は次の四点である。

- (1) 『後書』第一部に於けるキェルケゴールのキリスト教に関する客観的なものの理解は明かにピエティスムスの核印を帯びてゐる。特に彼の場合はヘルンフート兄弟団との関係が実証され得る。
- (2) キェルケゴールの目的はあくまでも信仰形成をめぐる実存の生成論であつて、その限りで客観的問題は実存伝達の視点から「点」として図式的に保留されていて、それが後期の思想に極めて曖昧さを残す結果となつてゐる。
- (3) キェルケゴール思想に於いてキリスト教に於ける客観性が点として固定されてゐるので、主体||客体の弁証法的

- (4) な内面性深化の実存構造に関する思想展開としては客観性が発展しないと云う欠陥を持っている。
キェルケゴールの取扱いは当時の思弁神学が予想以上に前提されている。

註 細かな註を付し、本論の一部を取り扱った拙論「キェルケゴールの『後書』第一部第一章第一項の研究」(一九六七年度「農大学紀要」)があるのでそれを参照されたい。